

拝啓

鬱陶しい日が続き、梅雨明けが待ち望まれる今日この頃ですが、岩稜会の皆さま方にはいかがお過ごしでしょうか。

平素はご無沙汰ばかりで失礼しております。

この度、突然このようなお手紙を差し上げますのは、湯浅美仁氏執筆の『前穂高岳東壁遭難六十三年目の検証』という本が出版されたことについて、至急皆さまにお知らせしたいこととお願いがあるからです。

湯浅氏の本は、すでに湯浅氏から送られて読まれた方もいらっしゃるかと存じます。石原國利様、澤田榮介様をはじめ、『石岡繁雄が語る氷壁・ナイロンザイル事件の真実』の著者相田武男様や私の所には、五月十日頃に届きました。このような本が出版される事を誰も知りませんでしたから、皆ビックリした次第です。また、湯浅氏からこの本を送られたという著名な方々から問い合わせの連絡を受けて、当惑もしております。

本に書かれている内容は、事実に基づいた検証ではなく、湯浅氏や高井氏の憶測と妄想で書かれたものです。それに関しては、当事者の石原様、澤田様と

も確認し合いました。そして、このような捏造された本が世に出たことは、父をはじめ石原様や澤田様、さらには栄光の歴史を持つ岩稜会に対する誹謗中傷であり冒瀆であると確信するに至りました。

そこで、関係者による会合と真剣な検討・反証を重ね、反論資料を作成しました。同封いたしますので、どうかご覧くださいませ。

月日の経つのは早いもので、父が逝きましてから十四年の歳月が流れようとしています。

思い起こせば、最愛の母を亡くして失意の人となった父を守るために、鈴鹿の家に定住するようになりましてから、二年ほどの歳月が流れた頃のことでした。当時の父は、脳梗塞・大動脈瘤・膀胱癌・アルツハイマーと大きな病気を抱えておりました。そんな状況の平成十八年五月七日、突然高井氏と湯浅氏が訪ねてみえたのです。

湯浅氏は上機嫌で「今日は手打ちに来たから」とおっしゃり、何のことかさっぱり判らない私は、とにかく来客のたびに父から言われてお出しすることになってお酒の用意にとりかかりました。私が席を外している間、高井・



湯浅両氏は、何やら糾弾するような口ぶりで父にお話でしたが、話の中身は私には聞き取れませんでした。

お帰りになる際、湯浅氏は「これで手打ちも済んだから、今後は一切この話はしません。高井さんも言いたいことは言えた訳だし、手打ちという事で来たのだから、これで一切を水に流しましょう」というようなことを言われました。後で父に聞いただと、「謝ってはおらんよ」とのこと。その頃の父は、先にも書きましたような状態であり、正常な判断ができなくなっておりました。そんな父を捕まえて糾弾するなど、常識を逸していると思ったのを覚えております。そしてその六年後の平成二十四年に、別紙(主旨)の通り、湯浅氏は四十頁ほどの冊子を石原様、澤田様にお見せになりました。しかし、内容のデタラメさを両氏から指摘されて、「絶対に公表はしません」と約束されたのです。

ところが、お二人には何ら相談されることもなく、したがって内容の確認依頼もなしに、今年の四月になって二百五十頁に膨らませた本が突然出版されました。当然、事実に反する事が繰り返し執拗に書かれた内容になっています。この事につきましては、当事者のお二人も大変遺憾に思っています。

さらに、先日（六月二日）の伊勢新聞に、この本の内容を紹介する記事が大きく掲載されました。それによって、ナイロンザイル事件の真実を知らない人たちに誤解を植え付けたり、当事者や岩稜会が貶められたりして、間違った歴史が残ることを恐れています。

どうか皆様、今こそ岩稜会が一丸となって、湯浅氏に抗議してくださいませよう、伏してお願い申し上げます。

長々と記しましたことをお詫び申し上げます。

時節柄、お身体ご自愛下さいませ。

敬具

令和元年六月二十四日

岩稜会会員様

石岡あづみ 拝